提言

KUMP 雑感

岩﨑 泰彦
化学生命工学部 化学・物質工学科 教授

プロジェクト４年目終了を目前にして自身の活動を中心に振り返りつつ、これからについても考えてみたい。まずは、プロジェクトの命題でもあるブランディングの観点から。今更であるが、KUMP の目的は医用高分子の研究が関西大学の特色のひとつであることを広く知ってもらうことにある。プロジェクト内で行った研究成果が画期的な治療手段として利用されれば分かりやすいが、なかなか容易いことではない。KUMP をきっかけに大阪医科大学との連携が活発化し、多くの共同研究が実施されるようになった。臨床医の先生方と話をしていると医療現場に数多くの高分子材料が存在していることを認識されている反面、高分子科学があまり浸透していないことに気づく。エンドユーザーに医用高分子の中身を知ってもらわなければ、我々の研究成果が世の中に知れ渡る機会が半減してしまう。まずはこの絶好の機会を逃さぬためにも、医用高分子研究の可能性を熱く伝え、確たる実験証拠を蓄積しながら目標に向かって歩みを続けることが大切であろう。

人材育成が大学の本分であることは言うまでもなく、KUMP での活動を通じ医療分野の発展に資する人材を輩出することも KUMP の目的と言えよう。だが、これも一筋縄ではいかない。筆者が所属する学科では３年次の秋学期に学生が卒業研究を行う配属先がおおかた決定し、学部生のおよそ半数が大学院に進学を希望する。研究室での活動は大学生活の総まとめとも捉えることができ、それまで座学で学んだことを活かしつつ、未知の課題に挑む。実体験型 RPG とも言えよう。しかし、多くの学生は結果がどうなるかわからない研究をはじめると途端に不安そうな顔をする。わからなくもないが、この状況をポジティブに捉え、未知の世界を切り拓く面白さを体感して欲しい。そのためには土台となる基礎知識と膨大な実験が必要になる。長年続いている研究は別として最初から思い通りに進む研究はほとんどない。しばしば陥る難境に屈しない強靭な体力と精神力を維持するために、研究に対するモチベーションが必要になる。先にも述べたように、医療材料の研究において実施した研究が直ちに実用化されることはほとんど期待できない。このような研究の特質を理解していた恩師は「バイオマテリアル研究を通じて科学の歴史に名前を残そう！」と私を常に励ましてくれた。今も「やっちゃん、最近、論文書いている？」と発破をかけてくださる。まさしく、これが筆者のモチベーションになっている。自らの軌跡を残せることを貴重と思える価値観を学生と共有したいと強く願っている。

最後は、「研究」。ニーズを感じながら面白いシーズを数多く生み出すことがプロジェクトのアクティビティーを表現するうえで最も大切な要素になると考えている。面白い研究成果を発信すれば反響は自然と大きくなる。勿論、簡単ではない。このグローバル社会においてありとあらゆることが世界中で展開されている。研究の面白さは斬新な発想のうえに成立し、他人が手を出していないこと（モノ）に挑戦しなければならない。とかく他人のやっていることは面白く見え、研究にもトレンドがある。私自身もそういうものに流される傾向（流行に乗る）にあるが、やはり独自性に富む研究を自己満足に陥らないようにしながら信念を持って続けていきたい。幸い筆者が師事した先生の全てが新たな治療技術を生み出す高いポテンシャルをもつ医用高分子を臨床に送り出している。その姿を間近に見てきた筆者も近い将来材料側から世の中に貢献し、ひいては KUMP を具現化する何かを残したいと考えている。